

オックスフォード大学
REES センター

なぜ人々は里親になるのか？

里親として子どもを養育するための動機づけに関する国際文献レビュー

Judy Sebba

Acknowledgements

Constructive comments on earlier drafts of this review were gratefully received from Professor Ian Sinclair, Emeritus Professor, Social Policy Research Unit, University of York and Consultant to the Rees Centre, Professor Robbie Gilligan, Professor of Social Work and Social Policy at Trinity College Dublin, Professor Anne Edwards Professor of Educational Studies and Director of the Department of Education, University of Oxford and Dr Derek Kirton, Reader in Social Policy and Social Work, University of Kent. Responsibility for the final text remains with the author.

The Rees Centre for Research in Fostering and Education is supported by the Core Assets Group, a children's services provider with a significant international track record in foster care provision. The Centre's research agenda is developed in consultation with key stakeholders in the UK and internationally. These stakeholders include children and their foster carers, social workers, local authorities and managers across the public and independent sectors. The research undertaken and its publication is governed by the University ethics process, and conducted independently of any specific interest groups or funders.

Professor Judy Sebba
Rees Centre for Research in Fostering and Education,
University of Oxford

September 2012

© 2012 Rees Centre. All rights reserved
ISBN 978-0-9576782-0-0

本報告書は早稲田大学社会的養育研究所がオックスフォード大学 Judy Sebba 教授から許可を得て、原著 *Why Do People Become Foster Carers?: An International Literature Review on the Motivation to Foster* (2012) を日本語訳したものです。

日本語訳作成をご快諾いただいた Judy Sebba 教授、監訳チームで本論文をご担当いただいた国立成育医療研究センターの引土達雄氏、そして本事業に助成していただいた日本財団に心より感謝申し上げます。

早稲田大学社会的養育研究所
所長 上鹿渡和宏

目次

概要	4
得られた主な知見	5
政策と実践において推奨される事項	6
調査研究において推奨される事項	6
背景	7
目的と範囲	7
動機づけに関する理論	8
里親養育に至るまでのプロセス	9
方法	10
レビューを行った研究の位置づけについて	10
レビューによって得られた主な知見	11
一般の人達は、里親養育をどのように見ているのか	11
潜在的な里親は、どのようにして里親養育を知るのか	13
どのような理由で人々は里親養育を最初に考え、どのような要因が申請に至らせることを決定づけるのか?	13
里親養育者の動機づけをアセスメントするためのアプローチ	15
最初の問い合わせから、里親養育に進むにあたっての壁	15
これらを科学的根拠とすることへの限界	16
英国における研究との比較	18
類似している要因	18
異なる要因	19
結論	20
政策と実践において推奨される事項	21
今後の調査において推奨される事項	21
参考文献	23

概要

「REES センター 里親養育と教育に関する調査部門」(Rees Centre for Research in Fostering and Education) は、2012 年 4 月、里親、子ども、若者、そして彼らと共に活動する専門家との調査研究を通して、社会的養育システムにいる若者達の人生に訪れるチャンスに変化をもたらすことを念頭に設立された。当センターが調査する事柄は、主要なステークホルダー(利害関係者)と協議し検討しているところであるが、当初から議論され、政策立案者と現場で実践している人達が強く関心を寄せているのは、里親になるにあたっての動機づけであった。どうすればより多くの人に里親になりたいと思ってもらえるかを知ることは、次の 2 つの理由から非常に重要になる。第一に、国際的に、里親の数よりも社会的養護のもとで暮らす子どもや若者の数が急速に増加している(例: Rodger et al., 2006)。第二に、里親養育についての情報を求める人のうち、更に検討を行う意志がある人は、半分のみであり(例: Ciarrochi et al., 2011)、Triseliotis et al. (2000)は、問い合わせの 80%が申請に至らないと述べている。

里親になる動機についての国際的な研究のレビューは、親族以外の里親になることに関心を持つ人、および最初の問い合わせからさらに次の段階へ進む人の数を増やすための戦略を探るために実施された。レビューを行うにあたり、挙げられた主な問いは以下の通りである。

人々が最初に(親族以外の)里親養育を考えるのはなぜか、そして、申請するかどうかを決定する要因は何か?

このレビューでは、里親、里親のアセスメント、選定および里親の維持・継続についての特徴に関しては扱っていない。これらすべては、更なる調査研究が求められる重要な分野である。関連のある研究を探すために電子データベースとウェブサイトを使用した。対象とした研究の大多数は 2000 年以降に発表されたものである。但し、それ以前の論文で重要なものはいくつか含めた。それらすべての論文は、親族以外の里親養育への最初の動機づけに焦点を当てており、詳細なインタビューから大規模な介入に至るまで、幅広い方法が用いられていた。それらの調査から 62 の研究を特定し、そこから、(焦点化された主要な問いについて)更に調査し、英国の 6 つの研究を除いた後、カナダ、米国、オーストラリアの 32 の研究をレビューの対象とした。今回のレビューにより得られた知見は、英国に焦点を当て最近公表された 2 つの調査研究と比較し、その違いについて検討された。その調査研究の 1 つは、McDermid et al (2012 および Sinclair 2005 による少し前のレビューを引用)による里親の特徴、里親のアセスメント、選定および里親の維持・継続に関する英国の文献のレビューであった。2 つ目の調査研究は Peake and Townsend の英国における里親の調査(2012)であった。上記の問いを扱うにあたり、これらの研究には問題が認められた。多くの研究が小規模で、単一のデータソースに依拠しているため、それらの知見の一般化には、限界があった。唯一の例外的な調査(e.g.: Ciarrochi et al., 2011 および Randle et al., 2012、どちらもオーストラリア人による調査)は、ほとんどの知見がサンプルとして里親の最初の動機づけの記憶に依存した後ろ向き研究である中、前向き研究を研究方法として採用していた。里親自身が重要な役割を果たしているのは 1 つの研究のみで(Brown et al., 2006)、その研究において、里親は調査のリサーチクエスト作成を手伝い、里親がその他の里親へのインタビュー調査を実施するために訓練を受ける等していた。

得られた主な知見

これらの国際的研究によって、里親養育の最初の動機づけに関して知られている内容に対し、より幅広い視点がもたらされる。本調査から、以下の3つの主要な知見が示された。

親族以外の子どもへの里親養育を検討するきっかけとして最も多いのは、子どもの頃、もしくは大人になってから他の里親に会ったことがある、または里親をしている人を知っているというものである。それよりも少ないものの、養育されている子どもや若者と交流することがきっかけになることもある (Rodger et al., 2006)。

里親養育に関して一般の人達が、神話的な固定概念を信じていることはよくあり、ファクトシート (報告書) 等、より良い情報によってそうした通説には対処できるが、里親として子どもを養育している人達と会うことが、教育の最も効果的な手段である (McHugh et al., 2004)。

里親に適切な支援が提供されないこと (Blythe et al., 2012) と、敬意や子どもに関する情報、大事な決定に里親に関わることが欠けているような交流は、里親が不満を抱く大きな原因であり、里親養育を考えようとする人達にネガティブなメッセージを与える可能性がある。

示されたその他の知見：

里親養育についてより多くのことを見出そうとする主な原動力は、「子どもを愛すること Loving children」と表現される、本質的に愛他主義によるもので、子どもの生活を違ったものにしたいたいという思いである。(例：Buehler et al., 2003)。

その他の動機づけとして、家族を増やしていくこと／一人でいる子にきょうだいを与えること、何かコミュニティに恩返しすること、里親に養育された、もしくは里子と一緒に育った個人的な経験、そして雇用され家庭でできる仕事を得ることの希望等 (例：Andersson, 2001) が含まれる。

動機づけに関し、里親を様々な所得によってグループ分けをした研究はほとんど認められていない (例：Randle et al., 2012) が、収入を得ることは、里親のための主な動機づけではない。出費を補完し、辞めた (あるいは里親養育のために変えた) 仕事の収入を、里親を行うことで得られる収入で代替することは、里親を続けることを決める上で重要な検討事項となっている (例 Rodger et al., 2006)。

最初の問い合わせに対する対応で、多くが迅速さに欠け、情報の請求から登録へと進むまでの間に大きな隔りがある。いくつかの研究では、迅速さが欠けていることよって里親の意欲が大きく失われているという報告がある (例：Keogh and Svensson, 1999)。

里親養育をしている人達に会うこと、もしくは、そうした人達のことを知るのは、最初の動機づけの鍵となることが、国際的に、また英国の文献からも明らかになっている (McDermid et al., 2012; Peake and Townsend, 2012)。

一般の人達における里親養育についての情報と理解の不足もまた、鍵となる課題である。様々な国によって里親養育サービスに影響する管轄の地域と文化的背景に違いがあるため、いくつかの知見を当てはめることはできないであろう。しかし、多くの知見は普遍的なものとして捉えることができ、政策と実践に活用されるべき国際的な調査のエビデンスがある。

政策と実践において推奨される事項

里親養育者は、里親の提供に関わる人達からリクルートにあたり、「大使」として行動することを求められている。里親養育について、人々に魅力を感じてもらい上で重要な役割を果たすことから、里親養育の普及に関し、この役割は強化されるべきである。里親達は、積極的に参加すべきであり、リクルート活動への里親の尽力に対し報酬が与えられるべきである。

大きなコミュニティになればなるほど、里親養育への潜在的な壁が、里親養育に関するネガティブ、もしくは神話的な固定概念に基づく認識によって生じるといふ国際的なエビデンスがある（例：Osborn et al., 2007）。Casey Programs (2005)の例は、「神話的固定概念を打破するための事実」を提供することで動機づけが高められ、英国の里親養育の提供に当てはめることも可能である。

最初の問い合わせに対して、より早くそして効果的に応じることで、里親になる可能性のある人達を増やすことができるかに、更に注目すべきである。

問い合わせはしたものの、その先のプロセスに至らなかった人達に対して、申請へのプロセスに進まないことを決めた要因を特定するため、実際に里親を提供している人達が、その人達を追跡調査するべきである。これは、すでに里親である人達を関与させていくことが、適切な役割になり得るであろう。

調査研究において推奨される事項

ほとんどの研究が、インタビュー、郵便またはオンラインアンケート、あるいはフォーカスグループだけのような1つのデータソースに依拠していた。そのことはトリアングレーション (Triangulation)¹を通じて調査結果を検証するべき検証力を弱めている。混合研究法が増えれば、「何が」と「どのように」という問いの両方を扱うことが可能になっていくであろう。

註1 トリアングレーション (Triangulation) は3つ以上のソースからの相互検証を通じてデータの妥当性を高める手法である。

「何が功を奏するのか」を検討する上で、部門（地方自治体と独立機関）をまたいだ、大規模な里親サンプルに対する調査を行うことにより、妥当性と普遍化にあたっての可能性を向上させることになるであろう。確かな評価とともに、最初の問い合わせを行う人達の数を増加させるようデザインされた介入を伴う実験的研究もまた、エビデンスベースを検討する上で有用であろう。

4つの研究を除くすべてのレビューされた研究が、実際に里親を行っている人達をサンプルとしていた。最初の問い合わせがなぜ里親登録まで進展しないのかについての理由の理解を深めるために、里親登録をしなかった人達 (Delfabbro et al., 2008; Keogh and Svensson, 1999)、あるいは、里親養育を考えたこともない人達 (Randle et al., 2012) のサンプル化が必要であり、前向き研究が行われる必要がある。また、すでに里親をしている人達から発せられる里親に関するネガティブな事柄が、そういった里親登録をしないという決定に関わっているかどうかに関する調査についても行うべきである。

既存の研究は、里親や将来の里親に対して、里親がリサーチクエスチョンを発信したり、もしくは、(適切な訓練を受けた上で) インタビュー調査を実施したりすることに取り組みせようとしていない。あるカナダの研究 (Brown et al., 2006) は、里親を調査に参加させデータ分析に取り組みせており、インタビューの中で里親になる動機づけに関する発言を分類していくことを求めている。今後の調査において、ピアトゥピア (対等な者同士間) による調査をすることにより、多様でより妥当性のある視点につながるかどうかを確認していくことが求められる。

背景

多くの里親の人達を惹きつける方法を理解することが重要である。英国では、社会的養護のもとで暮らす子どもが増えており (McDermid et al., 2012 は、2007~11年の間に9%増加しており、2011~12年では2%の増加が見られたことを示している)、一方、里親の数も増えているものの、増え方はそれほど多くはない。Fostering Network²は、英国で1万世帯の里親養育家庭の不足を予測している。同様に、米国、カナダでも、Rodger et al. (2006)は、里親に措置される子どもの数は、里親の数よりも早いスピードで増えていることを示している。オーストラリアでは、Osborn et al. (2007)は、社会的養護のもとで暮らす子どもの数が増えている一方、(親族以外の) 里親の数は減少しており、これを上回る供給が要求され (Ciarrochi et al., 2011)、そのためシステムに更に強い圧力が課されていることを報告している。里親養育に関する情報を問い合わせた人のうち、更に考えようとするのはその半分に過ぎない (例: Ciarrochi et al., 2011)。そして、Triseliotis et al. (2000)は、問い合わせをしても、その80%が申請に至っていないことを指摘している。

当初よりステークホルダー達との議論では、里親養育への動機づけが、政策立案者と実践している人達にとって最も重要であろうということが示唆されていた。実際の調査について調べたところ、多くの発表された研究はあるものの、それらの知見が十分に知られておらず、また活用されていないことが示唆された。Rees センターは、実践者と政策立案者が、得られた知見にアクセス可能となるよう取り組んでいる。

[HTTP://WWW.BBC.CO.UK/NEWS/EDUCATION-10869171](http://www.bbc.co.uk/news/education-10869171)

目的と範囲

国際的な調査に関するレビューは、親族以外の里親養育の最初の動機づけに関して扱っており、里親になることに関心を持つ人、および最初の問い合わせからさらに次の段階へ進む人の数を増やすための戦略を探るために実施された。レビューの問いは以下の通りである。

人々が最初にどのような理由で (親族以外の) 里親養育を考えるのか、そして、申請するかどうかを決定する要因は何か?

調査は全て重要な分野であるが、里親の特徴、里親のアセスメント、選定および里親の維持・継続について、本レビューでは扱っていない。レビューによって得られた知見は、英国に焦点を当て、最近公表された2つの調

査研究と比較しその違いについて検討された。McDermid et al. (2012)のレビューは、里親の特徴、里親のアセスメント、選定および里親の継続・維持について扱っている。また、Peake and Townsend's (2012)の調査は、英国における Fostering Network に所属する 1400 人以上の里親に対し、里親養育を行うことになった動機づけに関して答えてもらうために、アクセス可能なツールキットを知らせ実施された。しかし、これらの研究は、英国以外の重要な論文の調査に基づいて行われたものではなかった。

里親養育に影響を与える法的枠組みや文化的背景が異なっており、調査によって得られた知見を様々な国際的背景に当てはめるには限界がある。Osborn et al. (2007)は、例えば、オーストラリアでは、家族の再統合が重要視されるため、里親養育に関するいくつかの点について、他国で実施された調査研究をオーストラリアに当てはめることが難しいことを論じている。しかし、研究で得られた知見を当てはめることが難しいことが認められたことで、他の国際的背景から示される研究が、里親養育サービスを発展させる上で、「既成概念にとらわれずに (outside the box)」考えるための重要な刺激を与えてくれる。新たに里親養育をしようとする人に魅力を持ってもらうことを目指す上で、里親養育サービスの人達が、その方法を更に発展させ再考するための根拠を示すことが本レビューの目的である。

動機づけに関する理論

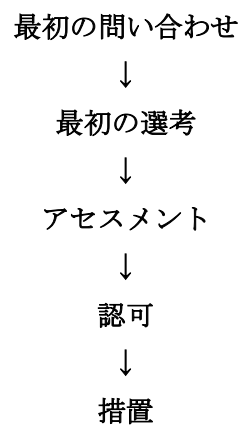
動機づけの分野の研究者で、人が里親養育のような状況に何をもちたらすのかということと、背景的要因によって、どのように人々が里親養育にアプローチしていくことになるのかということの両方の重要性について否定する研究者は、ほとんどいないであろう。しかし、動機づけの研究は一般的に、個人の資質または特性か、あるいは外部条件がどのように行動を形成するかのいずれかに注目することが通例である。内発的動機づけは、通常最も力強く、持続的な動機づけの形として捉えられる。それは個人の中に存在し、意図と行動に方向性を与え、価値観、信念、感情を含んだものである。一方、外発的動機づけは、報酬のような外的要因に関連し、行動を形成する。

調査では、仕事の満足感は外発的動機づけよりも内発的動機づけにより強く関連していることを示唆しており、申請することを決める際には、外的誘因に単に反応しているというよりも、里親になろうという内発的動機づけが強い要因となると考えられる。里親養育分野に適用されてきたその他の理論的アプローチは期待理論と公平理論がある。Rodger et al. (2006)は、それらの理論が、里親になろうとする動機づけ要因の役割を説明するにあたり有用であることを示唆している。期待理論は、個人が動機づけられるためには、努力、実現および成果がつながっていなければならないことを示している。従来の定義では、成果（例えば、子どもの明確な成長）は、里親養育を考えている人達にとっては、すぐに成果が表れないものであるかもしれず、長期的な成果についてのより幅広い理解の方がより強い影響力があるかもしれない。公平理論は、類似の状況下における自分と他者の報酬の比較が、公平感覚に影響を及ぼし、動機づけに影響を与えることを示唆している。里親養育を行う背景において、提供される報酬額のレベルは、主な動機づけではないとしても、申請に至る決定に関連しているかもしれない。

しかし、Latham and Pinder (2005)は、動機づけ理論をレビューし、国の文化の役割、仕事そのものの特徴、そして個人と取り組む実践がフィットしているかが、重要な動機づけであるとする文化的指向の強いアプローチについて論じている。

里親養育に至るまでのプロセス

下の図は、このレビューが扱うプロセスの段階を明確にするため、里親になるプロセスを簡単に示したものである。ここでは、どのように人々が里親養育の可能性に最初に気付くのか、そして何が影響して、彼らが里親になることを進展させていくのかに焦点を当てている。例えば、オーストラリアの2つの研究(Delfabbro et al., 2008; Keogh and Svensson, 1999) では、里親養育について、最初の間い合わせをした人達がなぜ里親にならないのかについて、特に注目している。本レビューでは、親族以外の里親養育の様々な種類について区別を行わなかった。



方法

このレビューは、里親養育の最初の動機づけに関する国際的な文献から、特に北米、オーストラリア圏およびスカンジナビアで行われた調査研究に注目し、それらの得られた知見を統合したものである。ASSIA、SCOPUS および SSCI を含む電子データベースで、2000 件以上（但し、いくつかの初期の「独創的で将来性のある」研究にもアクセスした）から「動機づけと里親養育」あるいは「動機づけと里親」で検索した。関連があるかについて、参考文献からスクリーニングを行った。全ての研究は、親族以外の里親が里親になろうと思った最初の動機づけに関するものであり、詳細なインタビューから大規模な介入に至るまで、幅広い方法が用いられていた。

この電子的文献検索の過程から、オーストラリア、ニュージーランド、米国とカナダの関係組織の web サイトを確認し、特定した研究の参考文献から 62 の論文、冊子および報告書を選んだ。これらについて更にスクリーニングを行い、すでに McDermid et al. (2012) でレビューされていた英国の 6 件の研究を除外した。除外され、残った 32 件の研究で得られた知見を今回のレビューの基盤としている。これらは、里親が里親養育を始める理由の直接的かつ中核的に特定しようとする研究から、里親としての更に広い活動やその他の問題（例：民族的組み合わせ）に焦点を当ててはいるが、里親養育の動機づけを周辺的に検討している研究に渡る。

これらの研究によって得られた知見は、最近の英国の研究 (McDermid et al., 2012) や英国の大規模な里親調査 (Peake and Townsend, 2012) によるレビューで示されている結論と比較検討を行った。英国において、里親養育の動機づけに関連する調査研究が比較的不足しているが、これは、最近の英国で行われた研究レビュー (McDermid et al., 2012) で取り上げられた研究の多くが相対的に古かったことを意味している。

レビューを行った研究の位置づけについて

人々が里親養育をする理由を具体的に検討した英国の研究のほとんどは、最近のサービス提供を背景としているものではなかった。McDermid et al. によってレビューされた里親養育の動機づけに関する 6 件の主要な「研究」はいずれも発表が 5 年以上前であった。4 件が少なくとも 8 年前に発表され、更なる調査研究の必要性を強調している。1 件は、最近の Ofsted (2011) の報告書だが、調査というより、モニタリングデータに関する報告であり、種類の異なるエビデンスを示している。Peake and Townsend (2012) の大規模調査は、里親の見解の最近のあり方を示している。

この分野は質的研究によって占められており、そのほとんどが頑健さを持ち合わせているものの、例えば、里親養育の何に人々が最初に魅力を感じるのか、のように更に広く一般化できる予測的なデータを与えてくれている。レビューされた研究の中で、実験研究デザインのものほとんど認められず、大半が主にオンライン、もしくは郵送のアンケートまたはインタビューによるものであった。これらの研究は以下の国々で実施されたものである。

オーストラリア	14
カナダ	6
USA	10
スウェーデン	1
ノルウェー／比較	1

レビューによって得られた主な知見

一般の人達は、里親養育をどのように見ているのか

里親養育が一般の人達に認識されることは、潜在的な里親に大きな影響を及ぼすものと考えられる。

オーストラリアの研究 (South Australian Department of Family and Community Studies, SADFCs 1997, Osborn et al., 2007 に引用されている研究、サンプル規模は記述なし) による調査当時の里親と元里親 (全サンプルの 2.4%) を含めた調査では、4 分の 1 を少し上回る人達が、里親になることを検討していた。全サンプルの 3 分の 1 以上の人達が、更に情報が欲しいと思っても誰に連絡すればよいのかわからなかったであろうと回答していたとし、その報告書は、リクルートキャンペーンは人口の大半に届いていないと結論づけている。オーストラリアの Delfabbro et al., (2008) もまた、大規模なリクルートキャンペーンは、魅力を感じてもらうことで多くの問い合わせがあるが、里親登録に至るのはその内の 2% 未満であり、それはコミュニティの人達による、里親養育の本質に関する事前の知識や理解が不足しているためであると述べている。調査を受けた 347 人のうち、里親養育について何らかのことを知っているのは 4 分の 1 未満であり、このことから研究者達は、大規模なリクルートキャンペーンに先立って、より良い情報が提供されるべきと結論づけている。

里親養育を以前に考えたことがなかった約 800 人のオーストラリアの代表的なサンプル (Randle et al., 2012) では、52% の人達が里親養育について何も知らないと回答し、また、その前の研究では、ほぼ 30% が里親養育の情報をどこで得られるかわからないと回答していたと述べている。対照的に Leber and LeCroy (2012) は、米国全土から抽出された 300 人以上のサンプルにおいて、大多数が意味内容を正しく答えることができおり、里親養育についてよく理解しているということを示している。但し、ほぼ 3 分の 2 の人は、里親に養育されている子ども達のほとんどが親族里親によって養育されているという誤った認識をしていた。

里親養育のイメージも、潜在的な里親に影響を及ぼす。

Casey Programs (2005, p.28) は、一般の人々への調査を通して、里親養育について多くの神話的固定概念があることを以下のように述べている。

里親に関わる機関が訂正しなければならない誤った神話的固定概念には、以下のような里親の義務についての思い込みが含まれる。里親は、大きな家を持っていないといけない、かなりの収入がなければならない、自分の子どもがいなければならない、自宅を所有していないといけない、といったものである。コミュニティの人たちは、どんな子どもが養育を必要としているかについて何も知らないことが多い。

Casey Programs (2005)では、研究者とサービス提供者のチームが、コミュニティの人達が思い込んでいる神話的固定概念を精査し、そうしたことを正すため、ファクトシートを作成した。例えば、デンバー郡では、Colorado the Collaborative が、一般の人達が持つ里親養育の神話的固定概念への認識を調査し、「なぜ我々は里親養育すべきか？」という質問について扱うファクトシートのことを伝えている。

同様に、カナダのDaniel (2011, p.914)は、里親への調査を実施し、里親が感じている内容についてまとめている。それは、里親養育をしていない人達が、里親養育を儲かる雇用形態の一種だと考えていることや、里親養育家庭のすべての里子とその実親は「悪い」と考えていること、そして、「誰も里子達の近くにいたくない」ので里親をしている人は友人を失うと思っているのではないかと、里親は感じていると回答していた。

里親についての「スティグマ」の問題は、オーストラリアの研究 (Blythe et al., 2012) でも指摘されている。その研究によれば、里親達は「里親」と示すことを避けていた。理由は、里親が否定的なことと関連していることと捉えられており、また結果的に、社会的孤立や地位の喪失を経験すると、里親が認識しているからであった。別のオーストラリアの研究 (Richardson et al., 2005) は、里親になるアボリジニーの人達とトレス海峡諸島民に焦点を当てているが、その社会の中で理解が不十分だと、将来的に里親なろうとは思わなくなると述べている。

更にBlythe et al. (2012)の研究では、特に長期に渡り措置され、養育に取り組んでいる女性の里親達は、自分の役割を給与の支払われる養育者というよりも、養育の役割を担う者として認識する傾向が強いことを継続的に報告している。これらの研究者達は、里親の役割に対する理解は、その人が提供している里親養育の種類によって異なることを見いだしている Smith and McHugh (2006)の初期の研究を支持している。

潜在的な里親は、どのようにして里親養育を知るのか

オンタリオの大規模調査(Rodger et al., 2006)は、どのように里親が里親養育を知ったのかについて調査を行っており、最も多かったのは「他の里親家族を知ったこと」(35%)、「他の里子達を知ったこと」(13%)、「自分の両親が里親養育をしていた」(11%)、「新聞広告を見た」(11%)であった。里親の存在が里親養育を考えることに影響を与えるということも重要である。オーストラリアのMcHugh et al. (2004)は、経験がある現在の里親は、「里親自身が話をすること」でリクルートに成功していると指摘した。このことは、里親と里子達が、里親の大使として活動する上で果たす重要な役割を明らかにしている。この知見は、オーストラリアの研究(例: Victorian Government Department of Human Services, 2003)、カナダの研究(例: Daniel, 2001)、米国の研究(例: Baum et al., 2001)、英国の研究(例: Triseliotis et al., 2000)等、多くの他の研究でも確認されている。

どのような理由で人々は里親養育を最初に考え、どのような要因が申請に至らせることを決定づけるのか?

内発的動機づけ

里親養育の動機づけに関する研究は、しばしば内発的(潜在的里親の内面にある価値観、信念そして感情)要因と外発的(外的要因に該当するそれらのことは、生まれた子どもに「きょうだい」が欲しい、相応しい住居や所得を得ること等のものである)要因とを区別している。里親になることに関連し、更に広がりを見せる家族や社会について認識される理由について、今後更に区別されていくかもしれない。

里親について

里親に直接関係している動機づけは、子どもを助けたいという願望が含まれていることが、スウェーデン(例: Andersson, 2001)、カナダ(例: Brown et al., 2006; MacGregor et al., 2006; Rodger et al., 2006)、オーストラリア(Broadly et al., 2009; Delfabbro et al., 2002)、米国(例: Baum et al., 2001; Buehler et al., 2003; Rhodes et al., 2006)において指摘された。その他、カナダでは、自身の養育スキルを使うこと(Brown et al., 2006)、また、いくつかの国(米国(Buehler et al., 2003; Denby et al., 1999)、オーストラリア(Delfabbro et al., 2002)、カナダ(Daniel, 2011; MacGregor et al., 2006; Rodger et al. 2006)において、愛を与え、コミュニティに恩返しすること(Colton et al., 2006)が、その他の動機づけとして研究では明らかにされている。最後に、カナダのRodger et al. (2006)と米国の研究(例: Baum et al., 2001; Buehler et al., 2003)による大規模調査から、主要な要因として、宗教的な動機づけが報告されている。

Rodger et al. (2006)は、カナダの里親満足度調査 (Denby et al., 1999 から引用) に回答した 652 人の里親が、「子ども達に愛を注ぐ親を与える」(92%)、そして「更なる被害から子どもを救う」(89%) の 2 つが最も選ばれていたことを報告している (回答者は 1 つ以上の内容を選択できた)。この知見は、米国の Cole (2005) も述べていることである。これらの調査を行った研究者は、内発的な面を強調している点で、これが仕事に関する動機づけの理論と整合していることを示唆していたが、先に示したように、動機づけに関する研究者は、仕事の特徴や個人と実際の仕事がフィットしているかが、重要であるとしている。カナダの小規模な研究では、Daniel (2011) が、経験豊富な里親は、最初の動機づけが子ども達への愛と個人的満足感だったことを報告している。それら 2 つは、その他の多くの研究でも同様に示されている (例: Delfabbro et al., 2002, オーストラリア)。

家族について

家族に関係する動機づけは、自分の子に兄弟/姉妹を与えたい (Baum et al., 2001; Cole, 2005; Rodger et al. 2006) ことや、(一般的な) 母親のように、外で働くよりむしろ生まれた子どもの世話をしたいという欲求 (Andersson, 2001; Swartz, 2004) が含まれる。養子縁組をしたいという要望もまた、いくつかの研究において、里親養育をしようという最初の動機づけであることが示されている (Andersson, 2001; Rodger et al. 2006)。その理由は、それが子育てを試してみることの方法の 1 つであることと、あるいは養子縁組ができない人達が利用できるからというものだった。但し、これは極めて稀な要因であるとオーストラリアの研究 (Delfabbro et al., 2002) は、指摘している。

外発的動機づけ

米国 (Baum et al., 2001; Denby et al., 1999) とカナダ (MacGregor et al., 2006; Rodger et al., 2006) で実施された研究は、子どもの生活に変化をもたらすことが、動機づけの主な要因であることを特定した。「子どもが自立して子どもがいなくなった家庭 (empty nest)」を埋めることもまたスウェーデン (Andersson, 2001) とカナダ (MacGregor et al., 2006; Rodger et al., 2006) の研究で動機づけとして示されている。Randle et al. (2012) の前向き研究では、多数のサンプルの 30% が「自分の子ども達のことでも忙しすぎる」ことが、その時に里親養育を考えない理由に挙げられている。カナダと米国の研究 (Brown et al., 2006; Cole, 2005; Daniel, 2011; Tyebjee, 2003) は、コミュニティで里親養育家庭が不足しており、里親養育を必要とする子どもが増えていることを認識することが、最初の動機づけであるとしている。米国の Baum et al. (2001) は、里親養育の必要性を認識することが、里親養育をするかしないかを決定する上で最も影響ある要因であることを見出している。オーストラリアの Randle et al. (2012) の前向き研究では、調査に回答した 62% が里親養育を考えたことがなかった。その理由として里親養育をすることを問われたことがなかったことが挙げられていた。里親養育の必要性について伝えていくことが欠けていることを示唆する結果であった。

多くの研究(例: Rodger et al., 2006)が、里親への支払いによる補足的な収入は、概ね里親養育をする上で、最初の主な理由には必ずしもならないと結論づけている。里親養育を続けることにおける賃金の役割はこのレビューの範囲外のことはあるが、賃金があることが里親養育を続けることにつながっていることは示されている(例: Hudson and Levasseur, 2002)。必ずしも主な動機づけではないとされるものの、里親の所得別に分けた上での動機づけの調査は、ほとんど行われていない。里親養育を行うことによって生じる経費を補填できるかや、辞めた(もしくは里親養育に変えた)仕事で得ていた収入を置き換えることができるかは、里親になることを決める上で重要な検討事項である(例: Rodger et al. 2006)。米国における里親家族の民族学的研究(Swartz, 2004)は、経済的動機づけが愛他主義的動機づけと同等であると結論づけている。その他の研究(つまり、Randle et al., 2012)は、対価が支払われることの役割は、様々な所得グループ(その研究において常に分けられているわけではない)によって、変化することを示している。

里親養育者の動機づけをアセスメントするためのアプローチ

里親になることへの動機づけをその後の愛着の安全性に関連付けるために、里親養育の動機づけ質問票(Yates et al., 1997)が米国のCole(2005)によって採用された。3つの主な動機づけは、家族の規模を大きくしたいという欲求、被害に遭う危険にある子どもを救いたいこと、そして、里親家庭の必要性に関わる社会的関心であった。家族の規模を大きくしたいという願望は、里親と子どもの間のその後の更に強い愛着に、最も強く関連していた。

米国で大規模サンプルで開発および実施された「里親満足度調査(Foster Parent Satisfaction Survey)」(FPSS, Denby et al., 1999)は、65の項目があり、5つのセクションに分け作成されている。最初の動機づけというよりは、満足度と里親を続けることに焦点を当てているものではあるが、1つのセクションは、「里親になる動機づけ」に焦点を当て作成されている。Rodger et al. (2006)は、カナダでFPSSの修正版を使用し、動機づけ、リクルート、満足度、里親の維持・継続性について報告している。彼らは、FPSSが里親を辞めることを考えた人達と、考えなかった人達とを識別する手段となることを示した。里親になる最初の理由が、「里親の愛他主義的な、そして内面的な動機づけに反映される」と彼らは結論付けている。これらのアセスメントの手法は、まだ英国以外では検証されていない。里親の選定プロセスの助けとなるアンケートおよびスケジュールの開発と評価に関する調査研究(例: Delgado and Pinto, 2011)は、このレビューの対象範囲ではない。

最初の問い合わせから、里親養育に進むにあたっての壁

里親になることの最初の動機づけを検討する際の重要な問題は、最初の問い合わせから実際に里親になる段階の間に、大きな隔たりがあることである。1990年、Bebbington and Milesは、英国イングランド全体の地方自治体で、最初に問い合わせをして、登録するまでの間でドロップアウトした人の率は70%から95%だったことを述べている。2004年から2006年に南オーストラリア州政府が行った大々的なリクルートキャンペーンによって、最初の問い合わせの数はかなり増えたが、結果的に、そのうち里親登録したのは2%に満たなかった(Delfabbro et al. 2008)。Ciarrochi et al. (2011)による、これまで里親養育をしたことがない1000名以上の前向き調査サンプルを用いたオーストラリアの調査では、80%が里親養育についてさらなる情報を要請したが、将来、里親養育を検討するだろうと回答したのはわずか45%だった。

問い合わせをした人達が、なぜ里親養育を求めなかったのかの理由について、オーストラリアでのSADFC

(1997)研究で得られた最も共通した理由は、環境の変化、仕事があること、彼らの生活スタイルが里親養育に合っていない、そこまで手が回らないことだった。また、彼ら自身の家族の分裂や生じる経費の問題も挙げられていた。里親養育サービスの人達に連絡したが、その後、関心が増すことのなかった 347 人についての Delfabbro et al. (2008)による研究では、サンプルの半数以上が、失敗する恐怖が最も懸念していることであったことが示唆されている。次に、虐待の虚偽の申し立ての恐れを含め、回答者の 30%が里親養育の性質そのものに懸念を示していた。

オーストラリアで行われた少し前の研究 (Keogh and Svensson 1999)では、関心を示した人達のわずか半数しか、問い合わせに応じた個別の対応を受け入れなかったことを示している。問い合わせをした人達の中で、96%の人達が 10 か月後に里親になっていなかった。しかし、英国イングランドの Peake and Townsend (2012)は、里親養育を検討してから、やろうと思うまでの期間は、平均してこれ以上に長くかかると述べている。但し、これら研究者達は、サービス提供者の種類については示していない。

オーストラリアの研究では、研究対象となった人達の半数が、個人的な環境のために、里親になることについて考えることをやめていた。また、当該機関が最初の問い合わせに対し応じていないため 4 分の 1 の人達は、里親になることの検討をやめている。3 分の 2 の人達は、問い合わせの結果に満足を示していなかった。

Casey Programs (2005, p. 40)は、潜在的な里親は、問い合わせの際、求めている反応が必ずしも得られなかったことを示している。

つまり、長期間待たされた、情報をタイムリーに受け取れなかった、あるいはオリエンテーションの実施に何ヶ月も待たされたという共通の経験があるということである。

ニューヨーク州エリー郡の Casey Programs (2005) チームは、里親になることについて問い合わせの連絡があったが、伝えた説明会に出席しなかった人達に関わり、興味を持ってもらうことを目的とした介入を試みている。欠席した説明会の 3 日以内に、潜在的な里親に連絡を取り、1 対 1 で会って情報を伝えることを提案した。このように会って話を聞いていなければ里親になる申請にまで進むことのなかった人達のリクルートの数を増やすことができていた。

厳格な要件、官僚主義、申し立てをされるリスク (Daniel, 2011)、行政の制度において中心的な存在ではなく疎外され、無力化されていること (Blythe et al., 2012)が、その他の壁として示されている。

これらを科学的根拠とすることへの限界

多くの研究において、すでに里親として養育を行うことが定着している人達がサンプルとなっており、それらの研究は、彼らが最初に里親について問い合わせた時に、どのように感じたかについての「記憶」の正確性に依拠している。後から考えてみたことであり、経験のリアリティという意味で、当初の動機づけについて、当時のまを正確に思い出せていないかもしれない。いくつかの研究は、特に里親養育について最初に問い合わせの後に続いて里親になることを考えなかった人達について、前方視的なサンプリングを行い、前向き研究の必要性を強調している。

ほとんどの研究はインタビュー調査を行っていたが、インタビューを実施する際に、研究者、専門家達、もしくはその他の人達が関与したのかについて、具体的に示されていなかった。これらのインタビューを実施した人達は、ある場合には、アセスメント、選定もしくは審査の過程に影響を与えると里親から認識されており、結果的に「ガードされた」回答へと導いた可能性がある。いずれの研究も（適切に訓練された）里親をインタビュー実施者として採用していなかった。但し、あるカナダの研究(Brown et al., 2006)は、里親養育への動機づけについて、インタビューで発言された内容の分類に、研究参加者である里親を関与させ、「概念マップ」手法のデータ分析に参加させている。Brown et al. は、研究者でなく、調査に参加した人達が、こうしたテーマのエキスパートであり、重要な事柄を定義し、話された内容のどれとどれが、どの程度相互に似ているのかを決定することができるのだと論じている。今後の研究では、インタビュー調査の実施過程に里親を参加させることが、恐らくは、より妥当性のある、様々な視点を生む方法となるだろう。

レビューを行った全ての研究の3分の1程にあたる研究が、小規模のサンプル（例えば25人以下の里親）で研究を行っており、そのサンプルは利便性から選ばれ、データソースを単一にしてインタビューを行っており、そのことでエビデンスの根幹は弱いものになっている。多様なデータソースを活用することで、1つのソースから得られた知見をその他のソースから得られた知見と照合し、浮かび上がった対立的な内容についても扱うことができる。様々な手法を採用することで、例えば介入の効果、また、実施にあたっての戦略等の様々な問いについて扱うことができる。例外(Randle et al., 2012)を除いては、調査において、例えば、所得を里親となる動機づけの1つの要因として見る里親達の社会・経済的環境を特定していない。Randle et al. の知見は、このことを明らかにすることにより、全国または平均の数値が、里親の集団間による変動を覆い隠しているかどうかを明らかにする可能性を示唆している。

英国における研究との比較 類似している要因

里親養育をしている人に会うこと、または知ることが、最初の主要な動機づけ要因となることは、国際的文献および英国の文献のエビデンスにおいて示されている(例:McDermid et al., 2012)。

里親養育を受けた、あるいは里子のいる家庭で育った経験もまた重要な動機づけであった(例:Peake and Townsend, 2012)。Rodger et al.(2006)は、カナダの大規模な調査において、里親養育を行おうとした最初の理由が「世帯収入を増やしたい」であったとした里親が7%未満であるとしており、これは、多くの場合、収入が主な最初の理由ではないという英国における調査レビューの内容と重なる傾向ではあるが、Fostering Networkの調査では、里親の40%が収入は、所得の損失とともに検討事項であることを示しており、多くの研究で引用されている。Peake and Townsend(2012)の調査において、里親の半数が以前はフルタイムで働いており、4分の1は里親をする前はパートタイムで働いており、その分の費用は支給されるべきであり、さもなければ里親を継続していくこと(このことはレビューの範囲外ではあるが)が、難しくなる傾向にあると指摘している(Hudson and Levasseur, 2002)。

Peake and Townsend (2012, p.10) の調査で認められた里親養育を始める理由のトップ5

- 子ども達が家族の一員になる機会となること (86%)
- 子ども達、あるいはその家族にとってそうすることが良いことである(77%)
- 子ども達に取り組む仕事をしたかった (69%)
- 過去に里親養育された経験、または両親が里親養育していた (36%)
- パートナーの希望(男性58%、女性30%)

この調査で得られたその他の理由は、以下の国際的文献から明らかになったものを反映している。

社会的養護のもとで暮らしていた個人的経験、もしくは里親養育の家族の中で育った個人的経験
子どもの世話をする個人的、もしくは専門家として経験を積むことを希望していること

McDermid et al. (2012)のレビューでは、満足感、子どもの成長を見ることができること、子どもへの愛情と何か価値あることをしたいという内発的な要因について述べられている。McDermid et al.によって報告された外発的要因は、子どもの生活に変化をもたらすこと、何かを提供すること、里親自身の子ども時代の経験(例えば、里親養育を受けたこと)、里親が必要であることの認識、そして、自身の家族を大きくすること、もしくは自身の家族に「代わるものにする」が含まれていた。

異なる要因

レビューされた国際的な調査によって、一般的な里親養育イメージが重要な位置づけとなることが示されており、「神話的な固定概念を打ち破る」方法の例として、里親を行っている人達が最初に情報を伝達する人となり、継続的に支援を行うことで重要な役割を果たすことが示された。これらのことが、将来に向けた政策や実践を発展させていく方法となる可能性を示唆している。特に、こうした調査結果から推測されることは、最初に里親養育について問い合わせをしてきた人達が、申請にまで進む割合をわずかであっても増加させる方法を示している。最初の問い合わせから進展しない人達については、ほとんど知られていないが、このことは「健全な」自己選択を反映している可能性があり、里親になる人達を増やしていくためには、問い合わせの全体数を増やしていくべきであるということもできる。

様々な国の里親養育サービスに影響を与える管轄地域や文化的背景における違いを考慮に入れると、いくつかの知見は、当てはめることができないかもしれない。しかし、多くの知見が、異なる国際的背景があっても一般化でき、そして国際的な調査研究は、政策と実践について発信するために活用されるべきであるとのエビデンスがある。

国際的な調査研究に関する今回のレビューは、研究が実施される方法について、更なる改善の余地があることを示唆している。

前向き研究サンプルやマルチメソッドデザインを用いた研究は少ないが、それらの手法は知見の妥当性を向上させるであろう。リサーチクエスチョンを精緻化させていくこと、(適切な研修を受けた上で)インタビューの実施、得られた結果の解釈に意見を言うこと等を通して、調査研究の過程に里親を参加させることによっても、妥当性が向上していくであろう。

結論

里親養育をするためには、そのことについて何かを知らなければならない。

Bebbington&Miles (1990, p.299) は、里親の供給を予測するため、英国の地方自治体全体の里親の特徴と状況を調べた将来性のある大規模研究で、次のように述べている。

里親になる申請をする人達に関する数多くの研究から導き出された結論は、里親になる決断は、1つの刺激に反応してなされる訳ではないということである。

20年以上経ってもなお、現在の英国および国際的文献は、このことが今も妥当であることを示唆している。最近の国際的文献(例: Osborn et al., 2007; Randle et al., 2012)によって示された最初の重要な知見は、オーストラリアの一般国民の2/3は、これまでに里親になることを問われたことがなかったため、里親養育について考えたことがないということであった。そして、大規模サンプルの半数が、里親養育について何も知らないことを示していた。

情報をより良く伝えることが求められている。

英国では、前項で挙げた数値と比較する前向き研究はないが、たとえ比率は低かったとしても、里親養育についてよりよく伝えるために改善すべきところはたくさんある。どのような情報をどのような人達に伝えるべきかについて、人口グループを特定化することも有効である。Randle et al. (2012)は、最初の検討事項が実施されるまでに数年が経過する可能性があり、自分達の現在の育児が里親養育の障壁になると見ている人達に、里親養育についてポジティブなイメージと情報をもたらすことで、将来的な申請が増える可能性があると述べている。

国際的文献は、**実際の里親との交流**は、里親養育について問い合わせをする最初の主要な動機づけ要因であると示唆している。英国および国際的な文献に挙げられているその他の説得力のある要因は、主に内面的な要因である。例えば、子ども達が社会で苦境に瀕していることに対する自分の価値観に応じて行うことや、自己実現を求めて行うことである。しかし、所得と家族を増やしたいというような外発的な要因は、里親養育をするための申請に進む上で、最終的な決断に重要な影響を与える要因である。

このレビューで扱う範囲を超えてはいるが、里親の維持・継続性に関する研究から、里親達が里親養育提供に関わる機関の人達により、どのように認識されているかという点で、多くの不足している点について明らかにしているエビデンスがある。里親達は、子どもや若者を支援するチームの一員であると繰り返しいわれている一方で、里親は子どもについて重要なことを知らされておらず、意思決定において自分達の視点が十分に重視されていないと報告している(例: Brown and Campbell, 2007; Daniel, 2011)。里親は、評価されておらず、認識もされていないと報告している(例えば、Brown and Calder, 1999; Hudson and Levasseur, 2002)。これらの知見は、里親になる最初の動機づけにおける里親の重要な役割と関連付ける必要がある。評価されていない、認識されていないと里親が認識していることがきちんと扱われるのであれば、すでに里親をしてきた人達は、里親養育に関して最初に問い合わせをしてきた人達に、多様で、一貫してポジティブな説明を恐らくするであろう。その結果、申請しようとする人達の数を増やすことにつながり、リクルートの改善につながるであろう。

政策と実践において推奨される事項

国際的なエビデンスは、より良い情報とポジティブなイメージを通して里親養育について、一般の人達を「教育」できることがまだあることを示している。里親養育を行う上での壁は、里親に関する知識や情報が欠如しており、広いコミュニティにおける里親に対するネガティブもしくは神話的な固定概念によって生じる(例:Osborn et al. 2007)。Casey Programs(2005)に示されている例は、「神話的な固定概念を打ち破る真実」を伝えることによって動機づけを高められることを示しており、そのことは里親養育を提供している人達によって行われている英国に当てはめることのできることであろう。

里親は、新規の里親のリクルートにあたり、「大使」として行動することを里親提供に関わる人達から参加を求められている。里親養育に対し人々に魅力を感じてもらい、果たす役割の重要性を考慮に入れると、里親養育の広報においてその役割は強化されるべきである。里親は積極的に関与するべきであり、彼らのリクルートへの尽力に対し報酬が与えられるべきである。

最初の問い合わせに対して、迅速かつ効果的に対応していく方法について更に検討することが必要である。最初の問い合わせに、里親を雇用して対応することは、彼らの影響力に関する、これまでのエビデンスを利用したことになるであろう。

里親と研究者は、里親をしようと思わない決断に影響を与える要因を特定するため、問い合わせの後、里親を行うまでのプロセスに進まない人達を対象とした追跡調査を行う必要がある。

今後の調査において推奨される事項

・ほとんどの研究は、インタビュー、郵便、オンライン調査、フォーカスグループ等の単一のデータソースに依存しており、そのことはトリアンギュレーション (Triangulation) ³を通じて調査結果を検証すべき能力を弱めている。混合研究法を使用する方が、「何なのか」や「どのような」という問いを扱うことができるであろう。

註³ トリアンギュレーション (Triangulation) は3つ以上のソースからの相互検証を通じてデータの妥当性を高める手法である。

・「何が功を奏するか」を検討するにあたっては、より大きな組織横断的(地方自治体、自治体から独立した機関、ボランティア)の里親サンプルを調査することで、妥当性と普遍化の可能性の両方を改善することができるであろう。様々な里親グループをより明確に区別することで、国単位もしくは平均値において、グループ間にこれまで見ていなかった有意な差があるかどうかについて、明らかになるであろう。

・ランダムに割り当てられたコントロール群を設定することや、これらが現実的でない場合は、介入前後の研究デザインや比較群を設定することで、特定のリクルート方法を検証することができ、科学的根拠となるかについての頑健性を向上させることができるであろう。

・4つの研究(すべてオーストラリア)を除いて、レビューされたすべての研究では、すでに里親をしている人

達をサンプルとしていた。最初の問い合わせが里親登録にまで進展しない理由をより良く理解するために、登録に進まないことを選んだ人達をサンプルにした調査が必要である (Delfabbro et al., 2008; Keogh and Svensson, 1999)。そして、(Ciarrochi et al., 2011; Randle et al., 2012 の研究のように) 里親を対象とする前向き研究が行われる必要がある。これらの研究は、すでに里親養育を行っている里親から発せられるネガティブな事柄が、問い合わせた人達が登録に進まないという決断に影響しているかどうかについての調査を含むべきである。

・人々が里親になぜなるのかについて、「里親自身が話をすること」の重要な役割は、更に調査していく価値がある。カナダの Brown et al. (2007)を除いては、これまでの研究において、里親を研究プロセスに関与させることは試みられていなかった。リサーチクエストを伝え、研修を実施することで、里親がその他の里親もしくは将来の里親へのインタビュー調査を実施するといった、里親には潜在的な役割がある。今後の調査研究は、里親が適切な調査スキルを持てるようにし、ピアトゥピア（対等な者同士間）で調査を行うことで、多様な、より妥当性のある視点へと導くことができるかどうかについて検証していくことが求められる。

Rees センターは、根拠としての頑健性を持ち、有益で時宜を得た調査研究を提供することに取り組んでいます。このレビュー論文の知見に基づき、幅広いステークホルダーの方々からのコンサルテーションを行い、このレビュー論文で示した推奨される事項をどのように前進させていくかについて検討していく予定です。ご意見をいただければ幸いです。

JUDY SEBBA

REES センター 里親養育と教育に関する調査部門 所長

(DIRECTOR REES CENTRE FOR RESEARCH IN FOSTERING AND EDUCATION)

REES.CENTRE@EDUCATION.OX.AC.UK

2012 年 9 月

参考文献

- Andersson, G. (2001). The motives of foster parents, their family and work circumstances. *British Journal of Social Work*, 31(2), 235-248. doi:10.1093/bjsw/31.2.235
- Baum, A. C., Crase, S. J., & Crase, K. L. (2001). Influences on the Decision to Become or Not Become a Foster Parent. *Family Relations*, 50(1), 202-213.
- Bebbington, A., & Miles, J. (1990). The Supply of Foster Families for Children in Care. *British Journal of Social Work*, 20, 283-307.
- Blythe, S. L., Halcomb, E. J., Wilkes, L., & Jackson, D. (2012). Perceptions of Long-Term Female Foster-Carers: I'm Not a Carer, I'm a Mother. *British Journal of Social Work*, 1-17. doi:10.1093/bjsw/bcs047
- Blythe, Stacy L, Jackson, D., Halcomb, E. J., & Wilkes, L. (2012). The Stigma of Being a Long-Term Foster Carer. *Journal of Family Nursing*, 18(2), 234-260. doi:10.1177/1074840711423913
- Broadly, T. R., Stoyles, G. J., McMullan, K., Caputi, P., & Crittenden, N. (2009). The Experiment of Foster Care. *Journal of Child and Family Studies*, 19(5), 559-571. doi:10.1007/s10826-009-9330-6
- Brown, J., & Calder, P. (1999). Concept-mapping the challenges faced by foster parents. *Children and Youth Services Review*, 21(6), 481-495. doi:10.1016/S0190-7409(99)00034-1
- Brown, J. D., & Campbell, M. (2007). Foster parent perceptions of placement success. *Children and Youth Services Review*, 29(8), 1010-1020. doi:10.1016/j.childyouth.2007.02.002
- Brown, J. D., Sigvaldason, N., & Bednar, L. M. (2006). Motives for Fostering Children with Alcohol-Related Disabilities. *Journal of Child and Family Studies*, 16(2), 197-208. doi:10.1007/s10826-006-9078-1
- Buehler, C., Cox, M. E., & Cuddeback, G. (2003). Foster Parents' Perceptions of Factors that Promote or Inhibit Successful Fostering. *Qualitative Social Work*, 2(1), 61-83. doi:10.1177/1473325003002001281
- Casey Programs. (2005). *Recruitment and Retention of Resource Families: Promising Practices and Lessons Learned*. Seattle: Casey Family Programs.
- Ciarrochi, J., Randle, M., Miller, L., & Dolnicar, S. (2011). Hope for the Future: Identifying the Individual Difference Characteristics of People Who Are Interested In and Intend To Foster-Care. *British Journal of Social Work*, 42(1), 7-25. doi:10.1093/bjsw/bcr052
- Cole, S. (2005). Foster Caregiver Motivation and Infant Attachment: How do Reasons for Fostering Affect Relationships? *Child and Adolescent Social Work Journal*, 22(5-6), 441-457. doi:10.1007/s10560-005-0021-x
- Colton, M., Roberts, S., & Williams, M. (2006). The Recruitment and Retention of Family Foster-Carers: An International and Cross-Cultural Analysis. *British Journal of Social Work*, 38(5), 865-884. doi:10.1093/bjsw/bcl375
- Daniel, E. (2011). Gentle iron will: Foster parents' perspectives. *Children and Youth Services Review*, 33(6), 910-917. doi:10.1016/j.childyouth.2010.12.009
- Delfabbro, P., Taplin, J., & Bentham, Y. (2002). Is it worthwhile? Motivational factors and perceived difficulties of foster caring in South Australia. *Adoption and Fostering*, 26(2), 28-37.

- Delfabbro, P., Borgas, M., Vast, R., Osborn, A. (2008). The effectiveness of public foster carer recruitment campaigns: The South Australian experience. *Children Australia*, 33(3), 29-36.
- Delgado, P., & Pinto, V. S. (2011). Criteria for the selection of foster families and monitoring of placements. *Children and Youth Services Review*, 33(6), 1031-1038. doi:10.1016/j.childyouth.2011.01.005
- Denby, R., Rindfleisch, N., & Bean, G. (1999). Predictors of foster parents' satisfaction and intent to continue to foster. *Child Abuse and Neglect*, 23(3), 287-303.
- Hedegaard, M. (2012) The dynamic aspects in children's learning and development. In: M. Hedegaard, A. Edwards & M. Fler Motives in Children's Development: Cultural-Historical Approaches Cambridge. Cambridge University Press.
- Hudson, P. Levasseur, K. (2002). 'Supporting Foster Parents: Caring Voices.', *Child Welfare*, 81, 853-877
- Keogh, L., & Svensson, U. (1999). Why don't they become foster carers? A study of people who inquire about foster care. *Children Australia*, 24(2), 13-19.
- Kirton, D. (2001). Love and money : payment, motivation and the fostering task. *Child and Family Social Work*, 6(3), 199-208.
- Latham, G. P. & Pinder, C. C. (2005) Work motivation theory and research at the dawn of the twenty-first century. *Annual Review of Psychology*. 56(1), 485-516.
- Leber, C., & LeCroy, C. W. (2012). Public perception of the foster care system: A national study. *Children and Youth Services Review*, 34(9), 1633-1638. doi:10.1016/j.childyouth.2012.04.027
- MacGregor, T. E., Rodger, S., Cummings, A. L., & Leschied, A. W. (2006). The Needs of Foster Parents: A Qualitative Study of Motivation, Support, and Retention. *Qualitative Social Work*, 5(3), 351-368. doi:10.1177/1473325006067365
- McDermid, S., Holmes, L., Kirton, D., and Signoretta, P. (2012). The demographic characteristics of foster carers in the UK : Motivations, barriers and messages for recruitment and retention. Loughborough/London/Canterbury: The Childhood Wellbeing Research Centre.
- McHugh, M., McNab, J., Smyth, C., Chalmers, J., Siminski, P., & Saunders, P. (2004). The Availability of Foster Carers. Sydney: Social Policy Research Centre, University of New South Wales.
- OFSTED(2011) Fostering Agencies and Fostering Services Data Set. London: OFSTED
- Osborn, A., Panozzo, S., Richardson, N. & Bromfield, L. (2007) Foster families: Research Brief 4. Melbourne: National Child Protection Clearinghouse, Australian Institute of Family Studies.
- Peake, L. & Townsend, L. (2012) The Motivations to Foster. London: The Fostering Network.
- Randle, M., Miller, L., Dolnicar, S. and Ciarrochi, J. (2012), The science of attracting foster carers. *Child & Family Social Work*. doi: 10.1111/j.1365-2206.2012.00881.x
- Rhodes, K. W., Cox, M. E., Orme, J. G., & Coakley, T. M. (2006). Foster parents' reasons for fostering and foster home utilization. *Journal of Sociology and Social Welfare*, 33, 105-126.
- Richardson, N., Bromfield, L and Higgins, D. (2005) The Recruitment, Retention, and Support of Aboriginal and Torres Strait Islander Foster Carers: A Literature Review. Melbourne: Australian Institute of Family Studies
- Rodger, S., Cummings, A., & Leschied, A. W. (2006). Who is caring for our most vulnerable children? The motivation to foster in child welfare. *Child Abuse and Neglect*, 30(10), 1129-42.

doi:10.1016/j.chiabu.2006.04.005

- Sinclair, I. (2005) *Fostering Now: Messages from Research*. London: Jessica Kingsley
- Smyth, C. and McHugh, M. (2006) Exploring the dimensions of professionalising fostering: Carers perceptions of their fostering role, *Children Australia*, 31(1). 12-19
- South Australian Department of Family and Community Services (SADFCS, 1997). *Fostering: The Future*. Adelaide: SADFCS
- Swartz, T. T. (2004). Mothering for the State: Foster Parenting and the Challenges of Government-Contracted Carework. *Gender & Society*, 18(5), 567-587. doi:10.1177/0891243204267778
- Triseliotis, J., Borland, M., & Hill, M. (2000) *Delivering Foster Care*. London: British Agencies for Adoption and Fostering.
- Tyebjee, T. (2003) Attitude, interest and motivation for adoption and foster care. *Child Welfare* 82 (6), 685-706
- Victorian Department of Human Services. (2003). *Public Parenting: A Review of Home-Based Care in Victoria*. Melbourne: Victorian Government Department of Human Services.
- Yates, A. M., Lekies, K. S., Stockdale, D. F., & Crase, S. J. (1997). *Motivations for Foster Parenting Inventory*. Ames, IA: Iowa State University Research Foundation.

早稲田大学大学院総合研究機構

社会的養育研究所

監訳チーム

担当：引土達雄（国立研究開発法人国立成育医療研究センターこころの診療部）

Supported by  日本 THE NIPPON
財団 FOUNDATION
